

# 船頭殿こそゆうけんなれ (狂言歌謡)

山内洋一郎

一

狂言「鞆猿」の猿歌は、歌謡研究としても注目に価する点があるようであるが、中世語としても興味深い所がある。その一つ「ゆうけん」について、考えてみたい。大蔵虎明本を用いる。

一のへいだて、二のへいたで、三にくろごま、しなのをとれ、せんだう殿こそゆうけんなれ、とまりくをながめつ、彼またしと申には、はくさいこくにて、ふげんもんじゆのめされたる、猿としとは、ごししやのもの……

この歌は「猿聲」にもあり、「船頭殿こそゆうけんなれ」と「ゆうけん」は二例共に濁点がない。一閉伊・二閉伊から黒駒を経て、四の信濃へと、東国から都へ向けて馬の産地を移し、船頭が「泊り泊りをながめつ、」ゆったり

とした歌の展開の中に、馬の力強さが支えている祝言性が、謡われる場を満たすようである。

この「ゆうけん」には「勇健」が当てられ、例外を見ない。駿馬のイメージを背景にすれば、船頭もまたきりつとした姿に見え、「勇健」で何一つ疑念の起きないところである。古川久編『狂言辞典 語彙編』(昭和三十八年)は「勇健」の字を示して、「勇気があって壮健なこと。いさましくてすこやかなこと。」として「鞆猿」を例示し、パジェス『日佛辞典』を挙げている。ここでは『邦訳日葡辞書』を用いたい。

Yūgen. ユウケン。(勇健) 力、または、勇敢さ。

Yūgena. 勇敢で力が強い。

邦訳には左の項をも参照するよう指示がある。

Yugon. ユゴン。(勇健) 勇敢、強力で壮健なこと。

漢音よみの「ユウケン」、呉音よみの「ユゴン」、両者はポルトガル語による語釈を見ても、ほぼ同意であるとわ

かる。辞書・節用類には左のようにあって、「ユゴン」が一般のようである。

勇猛ユウモウ — 健ケン 易林節用

勇健ユウケン<sup>義</sup> 天正十八年本節用

勇健ユウケン<sup>義</sup> 静嘉堂本運歩色葉集

勇健ユウケン<sup>義</sup> 落葉集本篇

文例として、『日本国語大辞典』の引く『サントスの御作業』を挙げておこう。福島邦道氏の翻字に原綴を記入する。

オラショし給ふ折節、忽ち車輪の廻るもとどまり、武士ども思はずに打擲をも止めたり。然るところにまた搦められ給ふ縄も自ら解けて、自由を得給へば、全体にすぎ間もなく、受け給ふ御傷も一時に平癒して、勇健(yugonn) になり給ふものなり。

卷第二 サンクレメンテのマルチリヨのこと  
このように「勇健ユウケン」は、身体が壮健で、従って気力も強いばあい用いられる。この語について、詳細に論述するのは、本稿の目的ではないので、以上に止めたい。

「勇健」をユウケンということもあった。

勇健ユウケン いろは字

勇健ユウケン 書言字考節用集

『合類節用集』も「ユウケン」で、共に「ユゴン」を載

せない。

漢音よみにすれば「ユウケン」であるから、『邦訳日葡辞書』の次項もこれに当たる。ポ語の説明からもこの漢語に疑いがない。

Yūgen, ユウケン (勇健) 力、または、勇敢さ。

Yūgenna (勇健な) 勇敢で力が強い。

このように考えてきたところを、狂言歌謡「船頭殿こそゆうけんなれ」に持ってゆくとうなるであろうか。諸校注は「勇健」を宛てて、語釈を付していない、語の示す意味のまま受け取っているであろう。はたして、それで十分であろうか。

## 二

『日葡辞書』には、もう一種の「ユウケン」が載っている。

Yūgen, Yutacana, 重々しくて權威のあること。

「せんだう殿こそゆうけんなれ、とまり／＼をながめつゝ」にはこの「ユウケン」こそふさわしくないか。船頭殿と敬意を払い、獅子を引き出し、普賢、文殊をあげて、祝言歌の重厚さを演出する、この唄には「重々しくて權威のある」ユウケンがふさわしい。では、この「ユウケン」は何か。『邦訳』では漢字を宛てていない。しかし、字音

語であろうから、何を想定し、語義の認定をすべきであろうか。

『日葡辞書』の註記と極めて似ているのがある。

[ ] en. Yulacana. Cossa graue, y de autoridad.

二六三年版

ロザリオの経

言葉の和げ

この丁の左端が損じていて字を欠くが、この前後に「yūgio(遊女)」「yūmen.(有免)」「yumiō(勇猛)」「yūracu.(遊樂)」「yurai.(由来)」があつたと推定され、

「yūgen」とあつたことは確かである。ポ語の意味説明も『日葡辞書』に同じい。

となれば、この『言葉の和げ』のもとになった個所を、本文の中に見出して挙げるべきなのであるが、破損の多いためか、未だ見出しえないでいるのは残念である。

そこで、更に調べを進めよう。キリシタン資料の中では、次例が見出される。

Sententiose, adu. Lus. Sentenciosamente. Iap.

Cotouari vomoxiroqu. Yūgeni. 拉葡日対訳辞典

ラテン語もポルトガル語も、言葉が重々しいさまを言い、金言、警句をも指すようである。この「ユウケン」は『日葡』の一つの「ユウケン」と同じ語であろう。そして、金沢大学法文学部国文学研究室編の索引篇<sup>3</sup>はこの例に翻字を与えていない。

資料を変えて、抄物を見よう。

個トハ心ノユウケンナル貞也。毛詩聽塵 三・19才

寛一民ニキブクアタラズシテ、民ヨリ取物ラバユウケンニスル也。毛詩聽塵 二十・1才

この二例を挙げて、山内は「漢語史における仮名書き漢語」で述べたことがある。

前者は毛伝「個寛大也」或いは疏「個兮容裕寛大」の注であり、後者は「寛以愛民」の注である。「おおらかに、ゆったりと」のこの語は、他の抄物にもキリシタン資料にも少々見え(下略)

「寛」がこの二例の意味をよく示している。

衛瓘—晋書列傳六、清間ハユウケンニユルリトシタ處カアルソ。蒙求抄 三冊本上ノ上

「清簡甚得朝野聲譽」の注である。

有—虚船ハ人モノヲヌ船也。觸舟トハ舟ニイキアタル也。雖—偏心ハ、セハ／＼シキ心也。ユウ玄ニナク、セハシナキ者ナレトモ、舟ヲツキアツルトテ不怒ハ、虚舟ノユヘ也。莊子抄、三

この「ユウ玄」も心のゆったり、おおらかな様を表している。ここは『莊子』山水第二十の「有虚舟來觸舟、雖有偏心之人不怒」の抄で、唐の成玄英の疏に「偏狹急也」とある。

。我身ヲウヤ／＼シウ敬テモテハ、人モアナトラヌソ。

寛ハユウケンニ人君ノ御座アレハ、人カツク物ソ。信

二誠カアレハ、人カ打マカセテスル者ソ。

京大本論語抄 陽貨第十七

これは「寛則得衆」の抄である。應永二十七年本『論語抄』も同様に

。寛ユウケンナル人ニハ人カソイヨキ程ニ、衆ヲウル也。

となっている。

このように抄物の「ユウケン」が仮名書きである中で、『莊子抄』で「玄」を用いていることに注意が向く。本字であろうか、或いは宛字であろうか。

「玄」は漢音ケン、呉音ゲン。通常呉音が用いられ、漢音は「玄冬素雪」に使われている。他に「ケン」はないものであろうか。

### 三

ここで、「幽玄」の一風変わった例を紹介したい。『和歌集心鉢抄抽肝要』にある「幽玄」の一部である。大学堂出版（昭44）のページ、行を記す。

。月ノ初ト讀ル詞、幽賢成風情也

11・6

。當世ノ連哥ノ趣ハ、懸幽賢ニ風情新、文字継キヲ能字端ヲ嗜、五韻相通連聲ヲ心二掛、是上手ノ心鉢也。

22・7

。霞ノ内ヲ出ヌ春駒ト云ニ、風ノ間ハ花ノ命ノ繫レテ、加様ニ幽賢ニ仕侍シ。

44・1

このように「幽賢」の形のみ用いている。歌論書の一つであるから、この「幽賢」は歌論語彙の「幽玄」であることは勿論で、他の漢字を用いていない。書き癖と見るべきものであろうが、この用法は取りも直さず「幽玄」が「ユウケン」と清んだことを意味しよう。「賢」は漢音ケン、呉音ゲンであるが、もっぱら「ケン」が用いられ、「ゲン」が通常であった時を知らない。従って「幽玄」が「ユウケン」と清んで用いられた時があった証となるのではなからうか。

易林本節用集

幽玄

落葉集 本篇

比較的濁点の線密な辞書に「ユウケン」と濁音のないの意味があるのではないかと思う。この「幽玄」がどのような意味で使われたか。「幽玄」と濁る形が文学的美意識表現に傾き、清音「ユウケン」は心のゆったりとした、大らかな意の一般語彙へと分化したのではないだろうか。溯って『色葉字類抄』を見ると、

幽玄

前田本 色葉字類抄 伊 量字

同じく清音である。この字の上に「幽奇<sup>イウキ</sup>」とあり、「同」は「地部」の意、漢字に平平と一点が付せられている。「幽」は暗い陰を意味し、「幽玄」となっても地の状

態を指す。もともと、諸橋編『大漢和辞典』では、①幽冥の国 ②幽かて奥深いこと ③老荘及び禅の智理の深遠なこと、と続けた後に、④詩歌の道の深遠幽奥なこと、転じて、芸術そのものをいふ。として、④の例示に左の文を挙げてゐる。

本朝續文粹、藤原敦光、柿本人麿畫讃竝序「方今為重『幽玄之古篇』、聊伝後素之新様」。

本邦の例を示しているところに、文芸理念としての「幽玄」が中国からでないことを暗示している。中国の『漢語大詞典』にも、①幽深玄妙 ②謂玄虚的釈道哲理 ③幽昧昏暗 ④幽冥、陰間、と分析し、文芸理念としては説いていない。但し、④の「幽冥、陰間」の前に「猶」を置き、④の意味を、比喩としての派生義と考えているようで、本義・派生義の認定はなお考えるべきであろう。また、日本での文芸理念としての「幽玄」については、文芸史上の多くの論考があるから、僅かの思いつきで云々すべきものではない。

#### 四

「幽玄」は、その意義から見て、佛教を通して一般庶民へ伝わった語（呉音）であるというよりは、知的階級から漢音「いうけん」として使われ始めた語ではなからうか。

文芸理念として清音のまま中世に多く用いられ、やがて「ウムの下濁る」という傾向により「ユウゲン」となったものであろう。その動きの中で、発音を元のままに

船頭殿こそゆうけんなれ

この「ゆうけん」のように「重々しく威厳がある」意に転じて、使われることがあった。この語が「勇健」であるとは思えない。抄物で挙例したような「ユウケン」全てに通じる語としては「勇健」は通じない。

「勇健」についていえば、元来「ユゴン」と呉音読みが基本で、『日本国語大辞典』の「ゆうけん」に引く漢字表記例には慎重であらねばならないだろう。近世の節用集などに「ユゴン」が姿を消すように見えるのは、精査せねば立言できないこと当然であるが、一般傾向としては、中世色の「ゆごん」が亡び、「ゆうけん」になってゆくと見てよいであろう。

注(1) 北川忠彦「『鞍猿』猿歌の成立時期について」『国語

国文』24巻7号

(2) 福島邦道『サントスの御作業 翻字研究篇』（勉誠社昭和54年）

(3) 高羽五郎、国語学資料『ロザリオの経 言葉の和げ』（昭和29年）

(4) 『ラホ日辞典の日本語』金沢大学法文学部国文学研究

室編（昭和45年）

（5） 山内「漢語史における仮名書き漢語」『国語語彙史の研究十二』（平成四年・七月）

補、 笹野堅編『幸若舞曲集』の「曲節集」に「ユウケンノ心有。アヒシヤウ也。ムツカシキツメ他。」（六〇二ページ）などと「ユウケン」が数例ある。「哀傷・祝言・恋慕」と共用され、歌論の幽玄との関連を思わせる。